

レファレンス

コーナー

貧困削減とマイクロファイナンスの役割

菅原房子

二〇〇六年度のノーベル平和賞にバングラデシュのグラミンバンク創立者であるムハマド・ユヌス氏が選ばれた。農村・農民の貧困削減に果たしたマイクロファイナンスの普及が認められたものである。ユヌス氏は、猪熊弘子訳『ムハマド・ユヌス自伝―貧困無き世界を目指す銀行家』（早川書房 一九九八年）の中で「文明世界では、貧困は貧困博物館に展示されるべきだ」、「貧困は、私たちが生きていく間に地上からなくすことができる」など、貧困問題への強い思いがマイクロファイナンス事業に込められていることを明かしている。

貧困撲滅は、二一世紀における国際的課題であり、国連も重要な目標として多様なアプローチで取り組んでいる。貧しい農民、女性の自立を

促す方法論として雇用の拡大、起業の推進に果たすマイクロファイナンスの理論と事例について、近年発刊された邦文文献（特にアジアを中心として）を紹介したい。

グラミン銀行についての文献は邦文でも数多く見られる。単行本として同銀行を紹介、分析しているものとしては前出の『自伝』とともに坪井ひろみ『グラミン銀行を知っていますか―貧困女性の開発と自立支援』（東洋経済新報社 二〇〇六年）が分かりやすく、特に貧困から立ち直る女性像が生き生きと紹介されている。

マイクロファイナンスのメカニズムや目的は多様である。供給側は銀行、組合、政府機関、NGOなど様々であり、さらに各種のインフォーマル・セクターも存在する。目的は主に農業経営支援、起業支援、女性のエンパワーメントなどであるが、基本的には貧困削減が使命とされている。

マイクロファイナンスが農村、貧困、女性問題への一つの対応であるとの認識を基本とした研究報告は事例研究に基づいたものが多い。その中で岡本真理子・栗野晴子・吉田秀美編著『マイクロファイナンス読本』（明石書店 一九九九年）は、FAO（国際開発高等教育機構）の研究会の成果を発表したもので、マイクロファイナンスの理論的分析をした上で、グラミン銀行の外にもボリビアのソリダリオ銀行、

マラウイ農村基金、インドSWA協同組合銀行などの事例研究によりマイクロファイナンスを様々な角度から分析している。また同研究会ではネパール、ベトナムの事例として、『マイクロファイナンスと地域の特性』（国際開発高等教育機構 一九九九年報告書）がある。

『マイクロファイナンスへのJICAの支援事例分析』（JICA国際協力研修所 二〇〇四年）ではJICAが途上国で実施している農村開発、女性の地位向上、家族計画などのプロジェクトにおけるマイクロファイナンスの位置づけと役割、問題点について事例研究している。

須田敏彦著『インド農村金融論』（日本評論社 二〇〇六年）は、インフォーマル金融の実態を解明した上で、一連の農村金融改革の実情と問題点を分析、SHG（自助グループ）およびNHG（貧しい女性による近隣グループ）の普及と金融機関との連携によるマイクロファイナンスの実例を分析し、貧困削減の新展開について詳述している。

政府や公的機関によって進められる開発事業の多くは、国や地域の発展、雇用の促進に一定の貢献をしているが、他方では必然的に開発弱者を生み出してきた。特に南アジアやアフリカでは、貧困者の救済や女性の自立という課題には手が回らなかった。そうした弱者の生活向上、エンパワーメントあるいは自立支援は多くの場合、NGOや各種ボランティアが補完してきた。いわば草の根的活動とマイクロファイナンスが有機的に結合し、一定の成果を収めたケースの代表例がグラミン銀行であろう。

松井範惇・池本幸生編著『アジアの開発と貧困』（明石書店 二〇〇六年）は、貧困から開発をどのように生み出すかについて理論的方法論を論じながら、特に女性のエンパワーメントという観点から女性の組織化、自立への支援策としてのマイクロファイナンスの役割について分析している。本書ではグラミン銀行の他に、マレーシア、タイ、中国、インドネシアなどの事例研究をしている。

女性や貧困者の自立を促すためには保護や制度的支援だけでは不十分であり雇用の創出、拡大によって貧困削減を図る必要がある。山形辰史編『雇用を通じた貧困削減―中間報告』（アジア経済研究所 二〇〇六年）はインドネシア、カンボジアなどの事例による貧困削減のための様々な雇用創出のための試みや政策を分析しており、最終報告が待たれる。

なお、アジアの農村金融の実態と問題点を詳細に論じている泉田洋一著『農村金融論―アジアの経験と経済発展』（東京大学出版会 二〇〇三年）では、マイクロファイナンスとは違った形の農村金融の実情が良く理解できる。

（すがわら ふさこ／アジア経済研究所図書館）